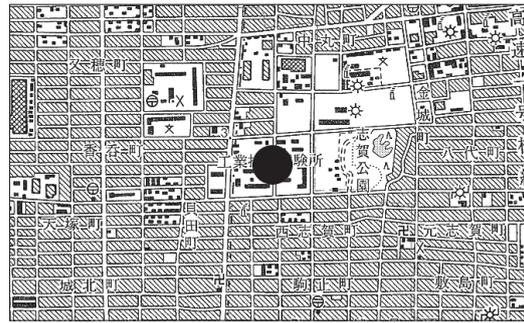


ひらてちょう  
平手町遺跡

所在地 名古屋市北区平手町1丁目1番地  
 調査理由 環境整備工事に伴う事前調査  
 調査期間 平成11年4月～9月  
 調査面積 1,500㎡  
 担当者 赤塚次郎・加藤博紀・永井宏幸



調査地点 (1/2.5万「名古屋北部」)

**調査の経過** 発掘調査は通産省名古屋工業技術院名古屋工業技術研究所内の環境整備工事に伴うもので、通産省より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成11年4月～9月にかけて試掘・立会調査を含め1,500㎡を対象に行った。

**立地と環境** 平手町遺跡は、名古屋市北区平手町1丁目に所在する。名古屋市北東から南西に流れる庄内川と矢田川の合流地点から約2km南下した標高5m前後の沖積地に立地する。隣接する遺跡としては、南西に弥生時代の拠点集落として有名な西志賀遺跡、北東に弥生時代から戦国時代にいたる複合遺跡である志賀公園遺跡がある。

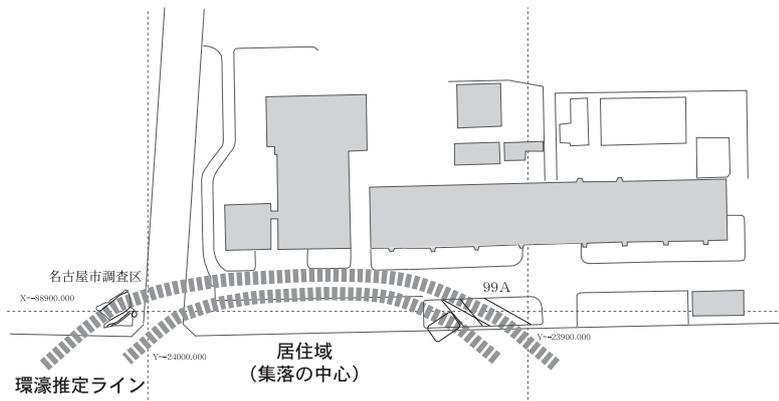
**調査の概要** 調査区はA～C区を設定した。そのうちB区は遺構・遺物ともに希薄であったため、トレンチ調査を行った。C区は調査対象深度が上面遺構の検出面に相当したため、遺構検出に留めた。遺構・遺物が確認できたA区について、弥生時代に関して概要を記す。

**弥生時代** 弥生時代の遺構としては、環濠と推定される溝2条、竪穴住居1軒、墳丘墓の溝1条などを検出した。

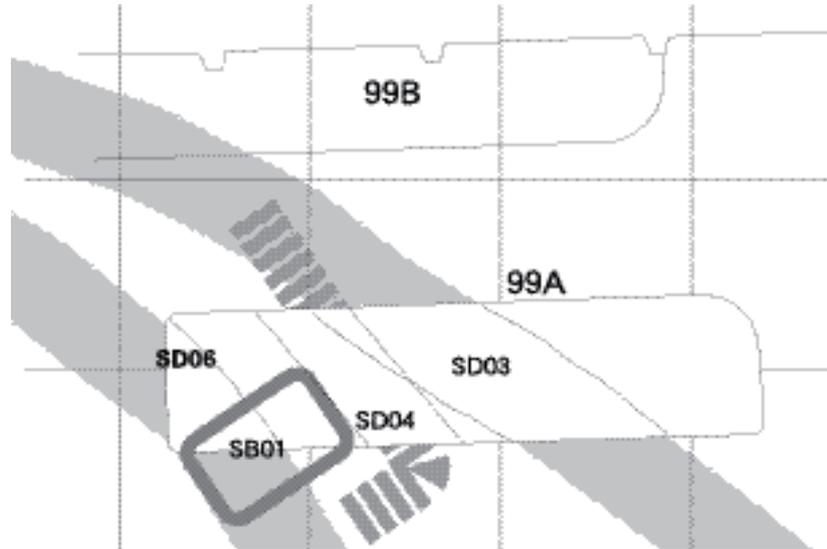
環濠と推定される溝は調査区を東西に縦断するS D 03と調査区南西隅にかろうじて検出されたS D 06がある。S D 03は断面形が逆台形、上部幅約7m、下部幅約2m、深さ1.2mの規模を有する。堆積状況については、ハマグリを主体とする混貝土層が大きく3層、その間に炭化物層や焼土層を挟むことが観察できた。溝の埋没時期については、出土土器から中期中葉(貝田町式)を中心に、中期前葉(朝日式)～中期末葉(高蔵式)が比定できる。一方、S D 06は調査区隅で検出されたため規模が推定できない。堆積状況については、カキ主体の混土貝層とハマグリ主体の混土貝層が観察できた。溝の埋没時期については、出土土器から前期後半を中心に上層では中期前葉(朝日式)が比定できる。

その他の遺構としては、土塁と推定できる版築状の堆積がS D 03とS D 06の間に確認できた。また、土塁の上位には中期末(高蔵式)の竪穴住居、S D 03に重なって確認できた後期前半(山中式)に比定できる墳丘墓の溝(S D 04)がある。

今回の調査で検出した溝(S D 03)は名古屋市教育委員会の調査(1995年)によって検出された溝の規模や出土遺物の時期から同一遺構の可能性が高い。したがって、S D 03は西志賀遺跡の北端を取り囲む環濠として捉えられる。(永井宏幸)



第1図 環濠の推定ライン (1 : 2,000)



第2図 遺構全体図 (1 : 400)



S D 03 断面



S D 06 断面



99 A 弥生時代の遺構 (西から)